

第3章

アーバニティと社会運動

任哲

要約：都市で行われる社会運動についての先行研究では、運動の政治的意味合いが強調される一方で、なぜ運動が農村ではなく都市で発生するのかについては十分に解明できていない。都市の社会運動の最終目標について、多くの研究者は公共財の再分配、あるいは闘争による政治権力の奪還を目指すものだとして理解する。しかし、このようなアプローチでは70年代から活発になった「政権奪還と階級闘争を最終目標としない」新しい社会運動がなぜ都市を中心に行われているのかを説明できない。運動が都市で行われるのは偶然なのか、それとも何らかの都市的なものが作用するのか。もし、都市的なものがあるとするそれは何か。この論文では、これまでの都市の社会運動研究の中であまり注目されていなかったアーバニティに焦点をあて、先行研究をレビューする。

キーワード：

都市、アーバニティ、社会運動、マルクス主義、実証社会学

はじめに

都市で発生している社会運動に触れずに現代中国の社会を語ることはできない。社会運動が注目される背景には、中国のような権威主義体制下で社会運動が国家と社会の関係にどのような変化をもたらし、それが体制移行につながるかという問題意識がある。1989年の天安門事件以後、中国における社会運動は低調期に入り、再び注目されるようになったのは2000年代に入ってからである。環境保護、弱者の権利保護、歴史文化遺産の保護などをはじめとする様々な社会運動が都市で展開されており、研究者の注目を集めている。

政治学の視点から社会運動を分析する研究者は、安易に社会運動を体制転換や民主化と関連付けて議論するが、その試みが成功したとはいえない。1980年代の学生運動の記憶からなのか、運動を組織する側もその目的を、よりよいガバナンスのためであることを強調し、政治色を弱めようとする(姚 2015)。このような運動の特徴を捉えるに当たって、分析ツールとして使いやすいのが「政治的機会構造」(Gamson and Mayor 1996)、「新しい社会運動」(Buechler 1995)である。既存の政治構造に衝撃を与えない範囲で、

運動側が如何に政治的機会を利用したのか、如何にローカルの行政の対応を変えたのかを議論するのが、現代中国の社会運動に関する研究の特徴ともいえる。

ローカルレベルのガバナンスの話にとどまる社会運動研究に対し、危機感を覚える研究者もいる。その代表的な研究者である Perry は、若い世代の研究者はミクロのガバナンスの話だけではなく、「革命」の概念を取り入れるべきだと主張する (Perry 2007)。確かに、20 世紀の中国史の大半は革命の歴史であり、都市革命 (労働運動)、農村革命 (土地改革、階級闘争)、イデオロギー革命が交差していた。革命を語る際、都市と農村はそれぞれ別の空間で行われたものとして理解される。しかし、今日の社会運動になると、なぜ運動は都市で発生するのかについてはまだ十分に研究されていない。

これは、中国研究で都市が注目されていないことを意味するものではない。都市と農村を明確に分ける戸籍制度が存在するゆえ、中国研究では都市を行政概念あるいは制度概念として理解する傾向が強い。人口の流動を制限することが最初の目的であるが、都市の安定を優先しすぎたあまり、都市住民を優遇する各種社会制度が構築され、都市の戸籍は社会的ステータスにもなっている。本来は、行政的、地理的な概念として使われた都市住民 (中国語表現で「城里人」) の概念に、制度的な側面が加わった形になる。研究者は、制度的な側面に注目する一方で、運動が都市で発生する理由及び都市的なものが運動に与える影響については正面から取り上げていない。

人々の行動と考え方はその周りの環境 (集団、習慣、文化など) によって支配されるという Durkheim の考え方を借りて都市を理解するならば、都市に生活する人々は農村とは異なる環境下にあり、その集合行動にも何らかの特徴が見られるはずである。農村とは異なる都市の環境こそが筆者が理解するアーバニティであり、都市のコミュニティ、パーソナル・ネットワーク、社会構造、文化など幅広いものが含まれる。したがって、アーバニティが人々の行動を左右し、もっといえば人々の集まりによって成り立つ社会運動に何らかの影響を与えるという仮説を立てることができよう。もし、この仮説が成り立つのであれば、いわゆる「城」=アーバニティというものが人々の行動にどのような影響を与えるのかは、社会運動研究の本質的な部分であるに違いない。

中国の都市で展開される社会運動にはどのような特徴があるのだろうか。差別的な戸籍制度を廃止し、都市市民としての平等な権利を求める運動は理解しやすい。しかし、抑圧的な政治制度のもとで、このような社会運動は存在するものの大きな社会現象にはなっていない。注目されるのは、環境保護、歴史的建造物及び町並み保護、弱者支援といった、価値観やアイデンティティに由来するものが多い。これらの脱物質主義の性格が強い運動はなぜ都市で発生するのか。アーバニティのどの側面が人々の政治行動を活性化 (energize) 或いは抑制させるのか。都市特有の政治的行動は存在するのか。あるとすればそれは何か。これらの問いに答えるために、本稿では、都市政治、社会運動研究の中で、アーバニティに関する議論をレビューする。

ここで筆者が理解する社会運動、アーバニティとアーバニズムの概念について簡単に説明しよう。社会運動についてはさまざまな定義があるが、本稿では Tarrow の定義を引用し、社会運動を、普通の人々が力を合わせて、エリート、権力、敵対者と持続的に対決・交渉する行為と理解する (Tarrow 1998; 重富 2007, 4)。アーバニティは、もともと都市の人々の礼儀正しさ、マナーの良さという意味で使われていた言葉であり、civility に近い。アーバニズムの概念が社会科学で普及することにつれ、都市文化、都市的生活様式という意味合いがアーバニティの概念に付与された。現在、多くの研究者は両者を厳密に区別することなく、同等のものとして使うことが多い (Zijderveld 1998, 21)。日本語には、「都市的なもの」という表現もあるが、本稿ではいずれも同じ意味で捉える。

本稿の構成は次の通りである。第 I 節ではヨーロッパとアメリカの社会運動研究の中でアーバニティがどのように扱われてきたのかを簡単に紹介する。第 II 説では社会運動研究と都市問題研究の原点ともいわれる Wirth のアーバニズム論を中心に提起し、その貢献と問題点について述べる。第 III 節では、Wirth のアーバニズム論に対する Castells の批判、その批判に対する Fischer の議論を紹介する。第 IV 節では、社会運動に対する文化の役割に関する研究を紹介しながら、アーバニティに関する実証研究の可能性を検討する。おわりにでは、レビューした研究に対する簡単なまとめ及び残された課題を述べる。

I アーバニティ：都市研究と社会運動研究の接点

都市の社会運動研究では、マルクス主義の影響を強く受けたヨーロッパ流と合理的選択論の影響を受けたアメリカ流があり、アーバニティに対する理解も異なる。80 年代以後、アメリカ流の研究が主流となるにつれ、社会運動研究でアーバニティに触れる研究は減少してきた。一方で、都市社会学の分野ではアーバニティについての研究が継続して行われていた。

都市における社会運動の歴史は長く、資本主義生産方式が始まった時まで遡ることができる。しかし、「都市の社会運動 (urban social movement)」という概念が社会科学に登場するのは 1960 年代以後である。この時期までの都市社会学は、社会統合 (social integration) のアプローチから都市の社会問題及び空間構造 (spatial structure) を分析していた。これに対し、Castells を始めとするマルクス主義の影響を強く受けた研究者らは、都市の社会衝突 (urban conflict) を、政治権力をめぐる戦いであると主張する (Mayer and Boudreau 2012, 274)。彼らによると、社会運動は社会の統合をもたらすだけではなく、労働組合及び政党を含むより根本的な政治的・社会的な変化をもたらすものである (Castells 1977)。社会運動に対するこのような理解は後に Castells 自身も使わなくなる

が、都市社会学の研究者に大きな影響を及ぼしていた (Pickvance 1976)

Castells の定義から読み取れるように、1970 年代の社会運動研究、正確にいうと Castells を初めとするマルクス主義の社会運動研究では、依然として政治的側面が強調されている。運動が発生する構造的要因に注目する一方で、社会運動のフレーム、イデオロギー、レパートリーに関する研究は重要視されていないといえよう。そして、大きな政治的・社会的の変化を目的としない小規模な社会運動、ローカルの問題を中心に取上げる社会運動も彼らの関心事ではなかった。

1980 年代になると、都市の社会運動はより多様化し、「政治権力をめぐる戦い」という狭い定義の範囲をはるかに超えていた。階級闘争の側面を重視していた Castells にも変化が見られた。彼は *The city and grassroots* (1983) の中で、社会運動を「都市に由来する (urban-oriented) 大衆動員で、社会の構造変容及び都市の意味の変化をもたらすもの」と定義した (Castells 1983, 305)。これは、闘争、政治権力を強調した 70 年代の定義に比べ、政治色が薄まっただけではなく、運動の目的をより広い意味でとらえている。固いマルクス主義者であると思われた Castells が、この著書の中で、サンフランシスコの同性愛者コミュニティを研究し、文化的アイデンティティに興味を示したことは、大きな変化であり、社会運動研究の変化を物語る。

Castells は都市の社会運動を「都市に由来する」というものの、なぜ社会運動が都市で発生するかについては触れていない。おそらく、運動の起源については、都市の構造的な問題にあるというマルクス主義のアプローチを貫いていたのであろう。都市の生態学的アスペクトが社会運動に何らかの影響を与えるという認識に関して、Castells は批判的で、社会科学の分析対象として成り立たないと認識していた (詳細は次のセクションで紹介)。

アメリカにおける社会運動研究が活発になると、社会運動研究全体の流れも大きく変化した。アメリカの研究スタイルはよりプラグマティックで、政治動員の条件、政治的機会構造が主な問題意識である。社会運動から革命に至るまでの政治的競争 (political contention) と国家の関係を分析することを主な目的とし、資源動員、組織形態、フレーミング、レパートリーなどが分析の焦点となっている。Tarrow、MacAdams、Tilly を代表とするアメリカの社会運動研究の流れの中で、アーバニティはあくまでも運動の背景の一つに過ぎず、運動のファクターとしては認識されていなかったのである (Mayer and Boudreau 2012, 279)。

しかし、Durkheim と Simmel の影響を強く受けた都市問題研究者は、都市的なものと人々の行動の間には何らかの関係があると信じ、模索し続けてきた。都市研究と社会運動研究はルーツを辿ると都市 (urban) の文脈で重なる部分が多い。しかし、今日の社会学の教科書 (たとえば「講座社会学」シリーズ) では、都市研究と社会運動研究をそれぞれ別の文脈で整理しており、相互の知的交流が見られない。問題の原点に戻り、

都市に関する議論を整理することは、今後の都市研究、社会運動研究の議論を深めることに重要な意味を持つと考えられる。

II 都市を如何に定義するか

都市の定義をめぐって学界ではいまだに論争が続いている。この節では、都市研究の中で代表的な Wirth のアーバンイズム論を取り上げ、その特徴と問題点に触れる。

都市という言葉は、日常用語にも、分析概念としてもよく使われるが、同時にきわめてあいまいな言葉でもある。都市の対概念を考えてみても、農村、漁村、村落など確定していない。日常生活レベルでは、「都会」と「田舎」という対比から都市という言葉があいまいに実感されているのが実情である（大谷 2007, 15）

人口密度で都市を捉えることがよくある。倉沢は都市を「ある社会のなかで、人口量の相対的に大きく、人口密度が相対的に高く、社会的に異質な人口からなる集落」と定義した（倉沢 1973, 4）。のちに、倉沢は「異質的な人口」の表現を削除し、「住民の生計が農業以外の産業に支えられている」という文言を付け加えた（倉沢 1997）しかし、この定義については批判的な意見も多い。大谷は、都市を厳密に定義することはできないと理解し、「定義を曖昧にしておくことの方が、『都市的なもの』を探っていくうえでは好都合だと考えている¹²（大谷 2007, 9）。目に見えるような形で捕らえることができないことから、アーバンティを人々の社会行動を規定する一つの要素として考慮することは困難な作業である。したがって、研究者はアーバンティに深く触れずに都市の問題点ばかり取り上げる傾向が強かった。

都市についての定義・解釈が氾濫している中で、Wirth の定義がもっとも参考になる。Wirth によると、都市とは「社会的に異質的な諸個人の、相対的に大きい・密度のある・永続的な集落である」（Wirth 1938 ; 大谷 2007, 93）。Wirth はその代表作である「urbanism as a way of life」（邦訳：生活様式としてのアーバンイズム）の中で、人口の三要素（規模、密度、異質性）によって定義される「都市」を独立変数とし、アーバンイズム（特徴的な都市的生活様式を構成する諸特徴の複合）と位置付けられる「都市社会」を従属変数とする分析モデルと提起した（大谷 2007, 93）。都市社会を分析するに当たって、人口の規模、密度、異質性といった生態学的な要素が決定的に影響を与えているというのが Wirth の研究の最大の特徴である。

ただし生活様式についての Wirth の議論は非常に煩雑でわかりにくい。Wirth が目指していた方向性を倉沢は以下のように述べる。

¹² 都市の定義についての整理は、大谷（2007）の第1章から第3章の議論を参考にてほしい。

アーバニズムの内容を解明するに当たって、Wirth は (1) 人口・技術・生態学的秩序をふくむ物質的構造、(2) 特徴的な社会構造・一連の社会制度・典型的な社会関係をふくむ社会組織、(3) 一連の態度や観念、ないし典型的な集合行動に加わり、都市的メカニズムの社会統制下にある一連のパーソナリティ、という三つの相互に関連した側面を区別した。上の枠組みを相互に関連した側面として呈示した Wirth の意図は、複雑な都市社会に接近するにあたって、まず可視的な形態から入り、これを手掛りに社会構造へ、さらにそこに潜む相互作用に、そして都会人という人間像へという、いわば人間適及的方针を考えていたとみられ、さらに一歩進めるならこれら三側面の相互関連の究明を目指していたとみられる (倉沢 1973, 4-5)

Wirth の壮大で意欲的な論理体系を簡単にまとめると次の通りになる。まずは人口規模の側面である。都市の人口規模が大きくなると、相互に認知しえない程度が増大する。通信技術の進歩により、人々は間接的な通信 (電話など) 手段で交流することが増え、人間関係もより合理的になる。そして、原子化された個人が増える。次は人口密度の側面で、人口の密度が増加すると、分業化と専門化が進み、社会的なコントラストが顕著になる。そして、異質な人間と頻繁に接触する過程で、自分と違う他者についてより寛容的になるのである。最後は人口の異質性の側面である。人口の異質性が増加すると、社会階層も多様に分化することを意味する。そして、異なる機能を持つ社会集団が大勢現れ、社会運動とつながるのである。

Wirth のアーバニズム論は都市の生態学的アспект、社会組織のアспект、都市的パーソナリティと集合行動のアспектとあらゆる側面を包括した野心的な構想である。これに対し、鈴木は、理論的に首尾一貫した理念型構成にはなっておらず、推論と実証の部分が明確ではないところが多いと指摘する一方で、「荒けずりの強さを発揮して、研究をリードする意欲を感じさせるものがある」と高く評価した (鈴木 1973, 12)。

Fischer は「都市型コミュニティ (urban styles of community) と都市型パーソナリティ (urban styles of personality)」とに関する社会学の伝統的アプローチは、Durkheim や Simmel やパークなどの研究においてその基礎があたえられ、Wirth によって見事に完成された」と Wirth のアーバニズム論を高く評価した (Fischer 1975, 奥田・広田編訳 1983, 53)。一方で、Wirth についての批判も多く、都市社会学における多くの問題意識は Wirth の定義への批判・再検討という形で成立しているといっても過言ではない。

III 都市的なものは存在するのか

Wirth のアーバニズム論は都市研究、社会運動研究を含む社会学の多くのテーマを包括している。しかし、理論体系が壮大すぎる分、批判する研究も多い。都市研究、都市

社会学は Wirth の論点を批判する過程で学問の体系が形成されたといえる。その体系は Wirth が構築したアーバニズム論を破壊するものというより、より綿密なアーバニズム論に作り上げたものである。

1. アーバニズム論に対する Castells の批判

都市的なもの、都市的諸現象に対する Castells の批判は痛烈なものであった。「マルクスと都市」というテーマのシンポジウムで、若き Castells は都市的諸現象に対し次のように批判した。

「都市的諸現象 (urban phenomena) や都市化 (urbanization) は、特定の現実的な対象でもなければ化学的な対象でもない。都市的諸現象とは、実際のところ何を指しているのだろうか。農村には関係せず都市にだけ関係するような現象とは一体何か。決して村落的とは言えない、都市的な現象などがはたして存在するのだろうか。……もっとも、交通、犯罪、住宅、政治派閥、人種間の緊張、緑地帯、教育施設、余暇活動等のすべてを『都市問題』の範疇に入れてしまうなら、われわれは、一専門分野として具体的に観察しうる特定の現実を持つなどとはとても言えないことになる。確かに『現代』社会は、『都市的』社会 (urban society) と呼べる。だが、このようないい加減な用語法こそが理論的にもイデオロギー的にも重要な問題を生み出す原因になっているのである」(Castells 1975; 奥田・広田編訳 1983, 5-6)

Castells の批判は、「シカゴ学派以来の都市社会学が極めて空間的な現象を扱い、またバージェスのモデルにみられるような特定の空間理論を基礎としながらも、そうした空間そのものの社会性を正当に問題にしてこなかったことに向けられた」(吉見 1998, 226)。都市を社会の空間への投影として理解する Castells は、都市空間を社会的に組織された、秩序があるものと捉える。そして、都市空間＝都市システム＝「経済システム、政治システム、イデオロギーシステムの諸要素によって、またその組み合わせ、そこから生まれる社会的実践によって形成される」という視点を提起した(大谷 2007, 103)。そして、都市社会学が何らかの統一した分野としての理論的对象や現実的对象を持たないとしても、なおそこには、①空間の社会的編制と、②集团的消費の過程という、二つの有効な問題領域が存在することを示した(吉見 1998, 227)。

しかし、これは Castells が Wirth のアーバニズム論を完全否定するものではない。彼はアーバニズム論の理論的仮説について次のように述べる。「都市の空間形態が社会関係を作り出し、一定領域での人間集合に見られる物理的な特性が彼らの行動の文化的なモデルを決定するといった『理論』がここには潜在しているのだ」(Castells 1975, 奥田・広田編訳 1983, 6-7)。

ある特定の空間に存在する何らかの特徴が人々の行動に影響を与えるという意味で、両者は通じるところがある。決定的な違いは、アーバニズム論が自然的、生態学的データに基づいて議論を展開することに対し、Castells は階級関係をめぐる社会的なデータを強調していることにある。

2. Fischer の下位文化理論 (subcultural theory)

Castells をはじめとするマルクス主義の都市論からの批判に対し、Wirth のアーバニズムを擁護する立場に立ったのが「下位文化理論」の提起者、Fischer である。

Fischer の「下位文化理論」は二つの側面を持つ。一つは Wirth のアーバニズム論を理論的に修正した側面、もう一つはパーソナル・ネットワークに関する調査研究に基づくネットワーク論である。下位文化理論は、修正したアーバニズム論とネットワーク論が接合する形で理論が展開されているのである (大谷 2007, 109)。

Fischer は、「行動や文化に関する現象は、いうまでもなく多面的な要因に基づいて発生する。そして (階級や民族性や性などの要因と比べて) アーバニズムは、多くの因果変数 (causal variables) のなかでそれほど重要な位置をしめてはいないのかもしれない。しかしアーバニズムが特定の現象を引き起こす第一原因ではないにしても、何らかの自立的な結果をもたらしているとするなら、それに関する研究はアーバニズムの性格を理解するうえに今もなお重要である」(Fischer1975; 奥田・広田編訳 1983, 52) と述べた上、生態学的なアプローチを支持する理由を次のように述べる。

「信念や行動のどれをとってみても、都市居住者と非都市居住者には、やはり、大きな違いが認められるのである。しかもこうした違いは、各々の集団に特有な性格からだけでは十分に説明されない。農村居住者に比べると都市居住者は彼らの共属する社会に支配的で伝統的な規範からは外れた行動様式をとる傾向があるのだ」(Fischer1975; 奥田・広田編訳 1983, 54)

Wirth のアーバニズム論に対する Fischer の修正は二つある。一つは「アーバニズムの進展は、個人の疎外と社会解体をもたらす」と都市のマイナス面を強調することに対し、「非通念性 (unconventionality、通念にとらわれないこと)」の概念を創作することで、都市が常に新しいものを生み出す文化創造の器としての役割をもっているというポジティブな側面を強調した。もう一つは、Wirth が独立変数として取り上げる人口の三要素 (規模、密度、異質性) の中から、定義があいまいで批判が集中していた密度と異質性を排除し、人口規模のみを独立変数として取り上げた。これにより、アーバニズムの社会的結果を非通念性の概念を用いて広く捉えようとしたのである (大谷 2007, 111-112)。

次に、Fischer は、下位文化を「様式的な信念や価値や規範のセットであり、それはより大きな社会システムや文化の中であって、相対的に区別されうる（人と人のネットワークや諸制度のセットとしての）社会的会体系と結びついている」（Fischer1975; 奥田・広田編訳 1983, 57）ものと定義した上、地域の人口規模が増大すればするほど、下位文化がどのように変化し、アーバニズムの社会的結果としての「非通念性」を生み出していくのかを検証したのである。

このように、Fischer は都市の生活を十分に理解しようとするなら、生態学的要因や下位文化の発展と普及に関する要因をひとつの導体的なモデルの中に組み込むことが必要であることを強調した。特にパーソナル・ネットワークへの着目は、実証的に都市的なものを解明していくもっとも有力な研究成果として、都市社会学の発展に大きく貢献した。

IV 課題としてのアーバニティ

ヨーロッパにおける社会運動研究は、マルクス主義の影響を強く受けており、運動を発生させる構造的な要因を分析している。その構造的な要因の一つとして、アーバニティは常に議論されていた。しかし、アーバニティがどのように社会運動に影響を与えているかについては十分に議論されていない。社会運動を定義するにあたって、Castells を代表とするマルクス主義の研究者は、依然として労働と資本の関係に依拠していた。しかし、このような理解では、都市で発生する環境保護、エコロジー、同性愛問題など、既存の規範（イデオロギー、認知、文化的側面）に挑戦する社会運動をうまく説明できない。このような運動は、階級構造に由来するものでもなければ、闘争を通じて物質利益の再分配或は政権奪還を目指すものではないが、しばしば都市の政治的なイシューとして成り立つ（Ruggiero 2014, 43-44）。

マルクス主義の社会運動理論では十分に説明できない、Touraine の言葉を借りれば「新しい社会運動」の説明にヒントを与えたのが、Lefebvre の空間の概念である。彼は『都市と空間』（1972）の中で「都市的なもの」をつぎのように説明する。

「都市的なもの（l'urbain）は都市（la ville）と厳密に区別される。というのは、都市的なものは都市炸裂のさなかに生まれ、明示されるものであるからである。しかし、それは中枢性、出会いの空間、モニュメント性、等々の長い間知られずにいた都市のいくつかの側面の再考察をうながし、その理由を可能にしてくれるのである。都市的なもの、すなわち都市社会はまだ存在していないが、潜在的に孕まれている。居住地、隔離、社会的実践に本質的な都市の中枢性……これらの間の矛盾を通して、意味に満ちたあるひとつの矛盾が示されている。

都市的なもの、それはわれわれに示され、またわれわれが分析しているようなある過程によって解放され、自由になった理論的概念である。それは、哲学者たちにおいて使われる言葉の伝統的な意味での本質ではない。それは、たとえば都会らしさ 'urbanite' のように賞賛の意味をこめて使われることばが信じ込ませようとしている実態でもない。それはむしろ形式であり、大地のみのりから、いわゆる文化的な象徴や作品に至る社会生活のあらゆる要素の出会いや集合の形式にほかならない。都市的なものは、分散の、隔離の過程のただなかで、出会いと集合と情報の要請としてあらわれるのである。」(Lefebvre 1972; 大谷 2007, 10-11)

Castells はこの Lefebvre の空間概念を強く批判していた。Castells にいわせると、「あらゆる要素の出会いや集合の形式」の表現は、すべてを都市問題の範疇に入れるものの、具体的な観察対象が存在しないことを意味するので、社会科学としては成り立たないものである。しかし、具体的な観察対象を絞るという作業は、「空間の裁断」であり、裁断がかぎりなく多様化することによって、科学的に説明する作業が逆に疑わしいものになるのである (Lefebvre 1974, 42-43)。Lefebvre が空間をあらゆる要素の集合と捉えることは、学問細分化に対する反動であるとも理解できる。しかし、空間の概念は実証性にかけることから多くの研究者が敬遠していることも事実である。

運動がなぜ都市で発生するのか。この問いに答える方法として、重要だと考えられる都市特有の要素（社会的、政治的、地理的、文化的）を並べ、1 つずつ検証することが考えられる。要素を検証する過程は各要素を類型化する過程でもある。しかし、この実証社会学の欠点は Lefebvre が指摘したとおりに、全体的なものを過度に分断化してしまう可能性がある。だからといって、過度に抽象化した概念で説明しようとする、有意義な分析対象を見失う危険がある。実証可能な要素を並べると同時に、相互の関係性を分析し、都市的なものを全体的に分析するという二つの作業は、まさに、Wirth の理論的な構想であり、都市社会学はこの構想を未だに突破できていないのである。

抽象的な空間概念を如何に社会科学とりわけ社会運動研究に応用するのか。この問題に関しては、社会運動における文化の役割を理論化した Zhao の研究が参考になる (Zhao 2010)。文化に関する定義は多様でありその境界も曖昧であることは既に多くの研究者が指摘している。そこで Zhao は文化を、人々の心の中に存在するものというより、「社会的に組織された行動 (socially organized practices)」として取り上げた。そして、社会運動における文化の役割を三つのメカニズム、すなわち問題解決のツール (problem-solving tool-kits)、スクリプト (scripts)、本能と習慣 (instincts and taken for granted routines) に分け、1989 年の天安門事件を検証した。彼によると、良く組織された社会運動であれば文化を問題解決のツールとして使うが、組織されていない運動になればなるほど、過去の記憶に基づいた行動、或は伝統文化に頼る傾向があるという。過去の記憶

に基づく行動として、重要人物（周恩来と胡耀邦）の追悼式に参加した大衆が社会運動に発展する事例を、本能的な行動として、跪いて請願書を提出する行為を、Zhao は取り上げた。

都市の社会運動を分析する際、主体の行動に表れる、都市の生活に由来する本能、習慣を特定することはできないだろうか。もっと分かりやすくいうと、都市では当たり前のようにとられる行動が、農村ではあたりまではないのは何か。都市の過去の記憶は運動によってどのように蘇るのか。運動側は目的を達成するために、都市的な特徴をいかに利用するのか。これらの課題を解決する過程で、都市的なものと社会運動の間に存在する関係に一步近づくことができよう。

おわりに

1990 年代に入ると、Castells の研究はネットワーク化された組織形態（networked organizational form）を強調するようになり、Fischer の研究に通じるものが多い。実証可能なネットワーク論で社会運動を分析することは、運動の規模、性格、目標に関係なく、比較可能な指標を提示してくれる。しかし、繰り返しになるが、ネットワーク論では運動の変化を捉えることが可能であるものの、運動の起因と変化を十分には説明できていない。アーバニティがどのような媒介変数を通じて社会運動に作用するのかについてはまだ模索段階であり、まだ学問体系としては成り立っていない。

都市のグローバル化はアーバニティを理解するもう一つの重要な要素となりつつある。グローバル化が進むにつれ、異なる都市で同じ問題に直面し、似たような社会運動が発生するケース（アラブの春、香港・台湾の学生運動）が近年増えている。これらの運動に関しては政治、経済、社会といった側面から解釈はされたものの、なぜ、都市でないといけないのかについてはまだ十分に説明できていない。残念ながら、本稿ではグローバル化の側面について触れることができなかった。また、ヒントとして示した、問題解決のツール、スクリプト、本能と習慣の三つの側面から都市で発生している社会運動を分析する検証作業もできていない。これらの作業は今後の課題にしたい。

引用文献

<日本語文献>

大谷信介（2007）『<都市的なもの>の社会学』ミネルヴァ書房。

奥田道大・広田康生編訳（1983）『都市の理論のためにー現代都市社会学の再検討』多賀出版。

倉沢進（1997）『『都市的なもの』とパーソナル・ネットワーク』『日本都市社会学会

年報』第 15 期, 149-161。

重富真一 (2007) 「開発と社会運動—先行研究の検討」(調査研究報告書) アジア経済研
究所。

鈴木広 (1973) 「比較都市類型論—発想の系譜を中心に」 倉沢進編『社会学講座 5 都
市社会学』東京大学出版会, 9-46。

吉見俊哉(1998)「都市と都市化の社会学」井上俊ほか編『岩波講座 現代社会学 (18)』,
213-248。

姚遠 (2015) 「歴史的町並み保存運動の台頭：政治的機会構造の視点から」天児慧・任
哲編『中国の都市化：拡張、不安定と管理メカニズム』アジア経済研究所, 23-44。

ルフェーヴル・アンリ (Lefebvre, Henri) (1972). *Espace et politique*. (今井成美訳
『空間と政治』晶文社 1975 年) .

—— (1974). *La production de l'espace* (斉藤日出治訳『空間の生産』青木書店 2000
年) .

<英語文献>

Buechler, Steven (1995). New social movement theories. *The Sociological
Quarterly*, 36(3), 441-464.

Castells, Manuel (1977). *The urban question: a Marxist approach*. London: Edward
Arnold.

----- (1975). Urban sociology and urban politics: From a critique to new trends
of research. *Comparative Urban Research*, 3(1),

----- (1983). *The city and the grassroots: a cross-cultural theory of urban
social movements* (No. 7). Berkeley: University of California Press.

Fischer, Claude (1975). Toward a subcultural theory of urbanism. *American Journal
of Sociology*, 80(6), 1319-1341.

Mayer Margit and Boudreau Julie-Anne (2012). Social movements in urban politics:
trends in research and practice in Mossberger, K., Clarke, S. E., and John, P. (Eds.) *The
oxford handbook of urban politics*. Cambridge: Oxford University Press, pp. 273-291.

Perry, Elizabeth (2007). Studying Chinese politics: farewell to revolution?, *The
China Journal*, 57, 1-22.

Pickvance, Christopher (1976). *Urban sociology: Critical essays*, London: Tavistock
Publication.

Ruggiero, Vincenzo (2014). *Movements in the city: Conflict in the European
metropolis*. New York; Routledge.

Tarrow, Sidney (1998). *Power in movement: Social movements and contentious*

politics. Cambridge: Cambridge University Press.

Gamson William and Meyer David (1996). Framing political opportunity. In: Doug McAdam et al. (eds.) *Comparative perspectives on social movements*. pp. 275-290.

Wirth, Luis (1938). Urbanism as a way of life. *American Journal of Sociology*, 44(1), 1-24.

Zhao, Dingxin (2010). Theorizing the role of culture in social movements: Illustrated by protests and contentions in modern China. *Social Movement Studies*, 9(1), 33-50.

Zijderveld, Anton (1998). *A theory of urbanity: the economic and civic culture of cities*. New Brunswick: Transaction Publishers.